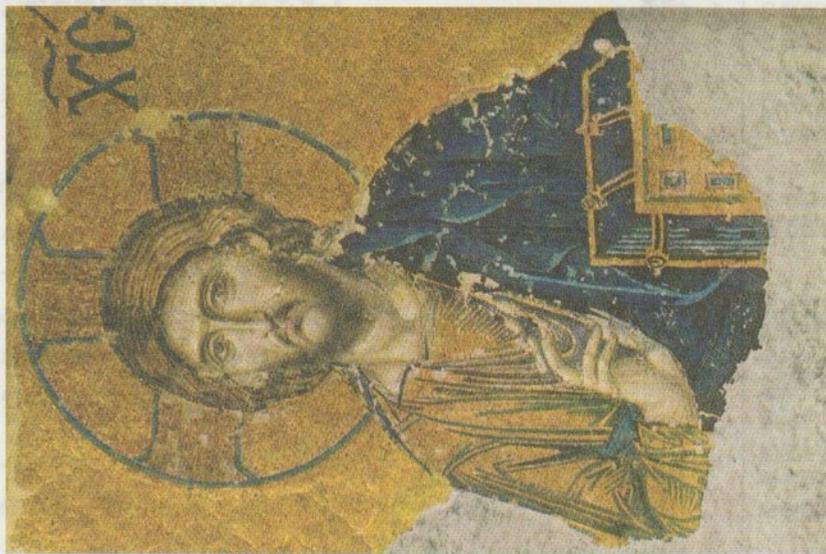


年間第4主日A年



キリスト モザイク「テイス」の部分

イスタンブール ハギア・ソフィア大聖堂 一二六〇年頃

心の貧しい人々は幸いてある、天の国はその人たちのものである

(マタイ5:3より)

聖書と典礼 2026.2.1

≡子の式文の味わい

教会に平和を願う祈り(一)

交わりの儀において、主の祈りと副文に続き、平和のあいさつへと展開する前に「教会に平和を願う祈り」が司祭によって唱えられます。「主イエス・キリスト、あなたは使徒に仰せになりました。『わたしは平和を残し、わたしの平和をあなたがたに与える』。主よ、わたしたちの罪ではなく、教会の信仰を顧み、おことばの通り教会に平和と一致をお与えください」という祈りです。ヨハネ14章27節のことばに基づき、イエスのことばを織り込むもので、式次第の中では、平和のあいさつ、そして聖体拝領という行為を通して願うことを表現し、それらに向かう準備の祈りとなっていることがわかります。

一九七八年版では「わたしは平和をあなたがたに残し、わたしの平和をあなたがたに与える」とあったのを、前半を「わたしは平和を残し」だけとし、後半の嘆願の相手を「主よ、」と再度明確にしたのが新しい式次第での変更点です。(編集部)

聖書本文は©日本基督教団発行「聖書 新共同訳(一九九九年版)による
日本音楽著作権協会(公)許第25096666-1501号「聖書と典礼」

(無断転写を禁ずる)
典礼文監修カトリック中教協議会
オリエンス宗教研究所 発行
357号

<今週の聖書朗読>

2月2日(月・祝・白)	主の奉獻	2月6日(金・記・赤)	聖アガタのおめめ殉教者
① マラキ3・1-4 △ヘブライ2・14-18		① シラ47・2-11	
② 158 ③ ④ (詩編24)		② 密64 ⑤ ⑥ (詩編18)	
③ 258 (主の奉獻)		③ 密77 ⑦ ⑧ ⑨	
④ ルカ2・22-40 △2・22-32		④ 密77 ⑦ ⑧ ⑨	
⑤ 2月3日(火・記・赤)	福音者ユスト高山右近殉教者	⑤ 密77 ⑦ ⑧ ⑨	
⑥ サムエル下18・9-10, 14b, 24-25a, 30-19・3		⑥ 密77 ⑦ ⑧ ⑨	
⑦ 138 ⑧ ③ (詩編86)		⑦ 密77 ⑦ ⑧ ⑨	
⑧ マルコ5・21-43		⑧ 密77 ⑦ ⑧ ⑨	
⑨ 2月4日(水・週・緑)		⑨ 密77 ⑦ ⑧ ⑨	
⑩ サムエル下24・2, 9-17		⑩ 密77 ⑦ ⑧ ⑨	
⑪ 114 ① ② (詩編32)		⑪ 密77 ⑦ ⑧ ⑨	
⑫ マルコ6・1-6		⑫ 密77 ⑦ ⑧ ⑨	
⑬ 2月5日(木・祝・赤)		⑬ 密77 ⑦ ⑧ ⑨	
⑭ 日本26聖人殉教者(聖パウロ三木と同志殉教者)		⑭ 密77 ⑦ ⑧ ⑨	
⑮ ガラテヤ2・19-20		⑮ 密77 ⑦ ⑧ ⑨	
⑯ 107 ① ③ (詩編126)		⑯ 密77 ⑦ ⑧ ⑨	
⑰ 267-① (年間の旋律)		⑰ 密77 ⑦ ⑧ ⑨	
⑱ マタイ28・16-20		⑱ 密77 ⑦ ⑧ ⑨	

(◎ 答唱詩編と ⑦ アレヤ唱の番号は『典礼聖歌』による)



26 兄弟たち、あなたがたが召されたときのことを、思い起こしてみなさい。人間的に見て知恵のある者が多かつたわけではなく、能力のある者や、家柄のよい者が多かつたわけでもありません。27ところが、神は知恵ある者に恥をかかせるため、世の無学な者を選び、力ある者に恥をかかせるため、世の無力な者を選びました。28また、神は地位のある者を無力な者とするため、世の無に等しい者、身分の卑しい者や見下げられている者を選びましたのです。29それは、だれ一人、神の前で誇ることがないようにするためです。30神によつてあなたがたはキリスト・イエスに結ばれ、このキリストは、わたしたちにとって神の知恵となり、義と聖と贖いとなりました。31「誇る者は主を誇れ」と書いてあるとおりになるためです。

アレルヤ唱(マタイ5:12a) 四四(4A) (下の楽譜)

マタイによる福音(マタイ5:1-12a)

1「そのとき」イエスは群衆を見て、山に登られた。腰を下ろされると、弟子たちが近くに寄つて来た。2そこで、イエスは口を開き、教えられた。



神は世の無力な者を選ばれた

「人間的な知恵や力に頼り、分派争いをしているコリントのキリスト者に対して、パウロは神の知恵、神の力であるキリストを思い出させ、ここでは自分たちの召命の原点を見つめ直させる」

31 誇る者は主を誇れ エレミヤ9:23をパウロが短くしたらしい。元の箇所では「誇る者は、この事を誇るがよい、目覚めてわたしを知ることを」となっている。

福音朗読

心の貧しい人々は、幸いである

「漁師であった弟子たちと、」
「いろいろな病気や苦しみに

3 心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。
4 悲しむ人々は、幸いである、その人たちは慰められる。
5 柔和な人々は、幸いである、その人たちは地を受け継ぐ。
6 義に飢え渇く人々は、幸いである、その人たちは満たされる。
7 憐れみ深い人々は、幸いである、その人たちは憐れみを受ける。
8 心の清い人々は、幸いである、その人たちは神を見る。
9 平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。
10 義のために迫害される人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。
11 わたしのためにののしられ、迫害され、身に覚えのないことであらゆる悪口を浴びせられるとき、あなたがたは幸いである。12 喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある。」



天においてあなたがたの報いは大きい
よろこびおどれ

悩む(4:24) 群衆を前にしてイエスは語り始める。マタイ5/7章の「山上の説教」の冒頭の部分。ここで幸いと呼ばれる人々のうち、3-6節は苦しみに耐えている人々の姿、7-11節はその苦しみの中でより積極的に生きようとしている人々の姿と言つてもよいであろう」

3 心の貧しい人々 直訳では「霊において貧しい人々」(ルカ6:20参照)。

5 柔和な人々は…… 詩編37:11に似ている。「柔和な」は3節の「貧しい」と同じヘブライ語のことはに行き着く。第一朗読(セファア2:2-3)の注参照。

※信仰宣言

説教の後に歌うか唱える。

共同祈願(信者の祈り) — 例文 —

いつもともにいてくださる神に信頼して祈りましょう。

先唱 (下の例文などを参考にして意向を唱える)

一同 神のことは永遠にとどまる。(下の楽譜)

愛に満ちておられる神よ、一人ひとりの小さな歩みを力強く導いてください。主から託された使命に誠実に取り組み、すべての人に希望の光を示すことができますように。

わたしたちの主イエス・キリストによつて。アーメン。

奉納祈願

聖なる父よ、このささげものを祭壇に供えて祈ります。わたしたちのために救いの秘跡としてください。

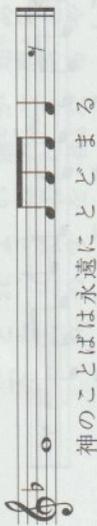
わたしたちの主イエス・キリストによつて。アーメン。

拝領の歌 (歌わない場合は下の拝領唱を唱える)

拝領祈願

いつくしみ深い父よ、救いの秘跡によつて養われるわたしたちが、まことの信仰に成長することができますように。

わたしたちの主イエス・キリストによつて。アーメン。



神のことは永遠にとどまる

共同祈願の意向(例文)

- ・貧しい人とともに生まれるキリストのみ心に従い、わたしたちが、互いに助け合つて神の国の福音を告げ知らせることができるようになる。
- ・弱い立場の人々を心に留め、力に頼る世の指導者たちの回心を促してください。思いやりにあふれる社会を築くことができますように。
- ・み心への信頼のうちに、毎日を通じている人々にいつくしみを注いでください。愛の温もりを周りにも伝えることができますように。
- ・(それぞれの共同体のために祈る)

拝領唱(マタイ5:3、5)

心の貧しい人は幸い。
天の国はその人のもの。
柔和な人は幸い。
その人は地を受け継ぐ。

まだまだ続くシノドスの歩み

二〇二二年に教皇フランシスコが招集された、世界代表司教会議(シノドス)第十六回通常総会は、「ともに歩む教会のため——交わり、参加、そして宣教」をテーマに、二〇二四年十月末まで続きました。このシノドスは、「シノドス性」そのものをテーマとして、最終文書を選択して終わりました。

第二バチカン公会議を受けて始まった司教代表によるこの会議に、今回、教皇フランシスコは投票権を持った三百六十四名の参加者を任命し、そのうち四分の一以上が司教ではなく、五十四名が女性でした。歴史的な出来事です。最終文書(日本語訳「シノドス流の教会——交わり、参加、宣教」)は、教皇フランシスコ自身によつて教皇の文書となり、単なる会議の報告書ではなく、教会全体に向けた明確な指示文書となりました。

さらに教皇フランシスコは、二〇二五年三月、入院中に指示を出し、この最終文書の方向性をそれぞれの地方教会で具体化し、その成果を評価するための「教会総

会」を、二〇二八年十月に開催すると宣言されました。シノドスの歩みはまだまだ続きます。

二〇二四年四月にローマを訪問した日本の司教団に、教皇フランシスコはこう言われました。

「(シノドスの取り組みは、)第二バチカン公会議が目指した神の民のあり方を実現しようとしている。新しい教会を作るのではなく、聖霊に導かれた教会を実現したい。シノドス性はイデオロギーではなく、民主主義でもない。またシノドス会期中には、「皆さんではなく、聖霊が主役です」と繰り返されました。

いま教会は、皆で一緒に聖霊の導きを識別する道を歩んでいます。支え合い、耳を傾け合うことが必要です。共に祈ることが必要です。そしてそれは、一朝一夕では実現しません。単なる機構改革でも実現しません。

最終文書に目を通し、霊における会話を通じて共に語りあい、耳を傾けあい、支えあい、祈りあいながら、聖霊の語る道を見いだす努力を続けていきましょう。希望はその歩みから生まれます。

(菊地 功 東京大司教・枢機卿)